

Madarao Jazz 2010

アマチュアジャズがんばれ!
斑尾ジャズ2010

16バンドが野外ステージで熱演

斑尾ジャズ2010～第4回ふるさとのジャズ交流祭」が8月21日(土)、22日(日)の2日間、斑尾高原特設ステージで開かれ、ジャズ愛好家とミュージシャンとが標高1000メートルの高原でさわやかに交流した。

東京をホームグラウンドに活動する11バンドと地元の長野、新潟で活動中の5バンドの計16バンドが出演。18人編成のビッグバンド、コンボ、デュオの各組みが約40分の割り当て時間の中で、最大限のパフォーマンスを披露した。

コンガやボンゴなどの打楽器が主体のリズムオーケストラやゴスペル集団などこれまでと少し毛色の異なったグループも加わり、アマチュア音楽祭ならではの多様性に富んだ演奏が聴かれ、2日間とも好天に恵まれ、参加者は出演者を含めて延べ1300人を超えた。会場は日傘と天幕で覆われた。

斑尾は野外ジャズフェスティバルの先駆けとなった「ニューポートジャズフェスティバル in 斑尾」が約20年間、開催されてきた会場だ。2004年以来4年間の中断後、再開されたフェスティバルは、以前とは発想を異にしてアマチュア中心の交流祭として、今年ですでに4年目を迎えた。

初回から連続参加のグループもあるが、毎度顔ぶれが変わるのも、音楽フェスティバルの面白さの一つ。今回初参加の JOY GOSPEL は新潟県上越市の20代～60歳代のゴスペル専門の合唱隊で、映画『天使にラブソング』でも歌われた「オー・ハッピー・デイ」などのゴスペルスタンダードを声高らかに熱唱した。

今年初参加の豊川雄也バンドは、メンバー年齢が23～25歳と若く、テクニカルで軽快なサウンドを展開した。

今回は、ジャズ評論家の瀬川昌久氏が参加し、二日間にわたって全演奏者に熱い視線を送っていた。また、今年から「瀬川昌久賞」が設けられ、第1



回目の瀬川賞は、打楽器バンドの北沢マロ with Rhythm Orchestra に贈られた。

かつて斑尾のステージには、ディジー・ガレスピー、B.B.キングなど世界的なミュージシャンが出演した。彼らが立った同じステージで演奏することは、一流のプロを目指す若手ミュージシャンにとっても、大きな励みとなるだろう。

(8月21、22日 長野・新潟 斑尾高原特設ステージ) 斑尾ジャズ実行委員 豊村泰彦